

<全体分析>

試験時間 60 分

解答形式

マーク式 36 問・記述式 13 問・論述式 1 問

分量・難易 (前年比較)

分量 (減少・やや減少・**変化なし**・やや増加・増加)

難易 (易化・やや易化・**変化なし**・やや難化・難化)

大問数は昨年度と同じ 4 題。総解答数も昨年度と同様に 50 問。例年同様に論述問題 (100 字) が 1 問出題された。正誤判定問題の出題数は、減少傾向が続いていたなか、昨年度は 18 問と増加したが、今年度は 14 問に減少した。昨年度と同様に正誤判定問題を中心に難問が散見され、全体として難易度の高い状況が続いている。

出題の特徴

アジア史 1 題、欧米史 3 題という欧米重視型の商学部の傾向通りに出題された。また、年代整序にかかわる問題は、昨年度は 1 問であったが今年度は 3 問であった。

その他トピックス

例年時事的な問題が出題されるのが本学部の特徴であるが、昨年度は大問IVで中国の通信機器企業が、今年度は大問IVでエリザベス 2 世の死去が出題された。大問IVの 14 の論述では、ジャクソンが勝利したアメリカ大統領選について出題されたが、2022 年度早慶レベル模試の ① [2] ⑦ではジャクソンの経歴を扱っている。なお、今年度の大問IIは、正誤判定問題がなく、設問のすべてが語句選択問題であった。

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	マーク式	ヨーロッパの中世都市	問B. 1. ロンバルディア同盟は教皇党の都市で結成されたので、皇帝党の多いピサは参加していない。3. 総督・評議会による統治は、18 世紀末のヴェネツィア共和国消滅まで維持。4. ジェノヴァは、ラテン帝国滅亡とビザンツ帝国復興に寄与。正文も細かく、消去法でも難。問C. 1. 「フランス国王」ではなく「フランス諸侯」。問D. 1. 12~13 世紀に繁栄。2. トロワはセーヌ川沿い。シャンパーニュ地方はフランス北東部で、フランス中部を流れるロワール川の流域ではない。また、「3 都市」ではなく「4 都市」。3. 東方貿易は香辛料などアジアの物産を独占的に扱った。琥珀や蜜蝋は、主にハンザ同盟が扱った。誤文には細かいものもあるが、正文は平易。問E. 3. アルビジョワ十字軍はフィリップ 2 世の時代に始まったが、当時主導したのはフランス諸侯で、続くルイ 8 世・ルイ 9 世の時代にカペー朝の王が主導した。ただ、4 は、ブーヴィーヌの戦いの前にすでにフランス内イギリス領は大幅に縮小しており、3・4 の正誤の判断は難。問G. 1. ミュンヘンやニュルンベルグ (ク) はドイツ南部の都市なので、北ドイツ都市で結成したハンザ同盟には参加していない。2. プロイセンで国家建設を試みたのは、ドイツ騎士団。4. 「ドイツ」ではなく「イギリス (イングランド)」。問J. 1. イェルサレムの一時回復に成功。問K. ハンザ同盟の 4 大商館は頻出。商学部では 2019 年度にノヴゴロドが問われた。	難

II	マーク式	大清帝国(清朝)の歴史	<p>問A. 「ホンタイジの治世」は1626～43年。4のチャハル部の帰順(1635)が該当するのは自明だが、「治世」を後金(清)内に限らず同時期と解釈するなら、当時まだ明は存続しており、2の『崇禎曆書』の完成(1634)も正解となり得る。問E. 2のフフホトはかなり細かいが、商学部では2019年度に同様の出題があった。問G. 2のガルダン=ハーンは、消去法でも解答できるが、2019年度商学部でも出題されているので、この機会に覚えておこう。問I. 4. マラッカ王国は、大清帝国成立より前の1511年に滅亡している。問J. 1. コーカンド=ハン国出身のヤークーブ=ベクが清朝統治下の新疆に独立政権を樹立しようとしたことが、イリ事件の背景にあったことは、複数の教科書に記されている。</p>	標準
III	マーク式	ヨーロッパにおける革命の歴史(近世～現代)	<p>問A. 1(1896～1902)→2(1905～11)→3(1958)→4(1979)。問B. 4(1775～83)→3(1791～1804)→1(1910～17/40)→2(1959)。問C. 1. 1968年の5月革命(5月危機)は、ド=ゴール大統領が議会の解散・総選挙で収束させ、当時の首相は辞任したが、翌年の国民投票の結果、ド=ゴールは大統領を辞任した。問E. 2. イギリスがニューアムステルダムを奪ったのは、1664年。2021年度商学部では、「イギリスは、オランダの北米植民地であったニューアムステルダムを奪い、ニューヨークと改名した。」という文が、チャールズ2世の治世であることが問われた。問F. 2. 王党派の中心が、「スコットランド」ではなく「イングランド西・北部」であることは、2021年度商学部で出題されている。問G. 1・3がアン女王時代、4がハノーヴァー朝初期なので、消去法で容易に2に絞れる。問K. 1. ブハーリンは、スターリンと対立し、失脚したのち処刑された。なお、「肅正」とあるが「肅清」が適切。2. トロツキーは亡命先のメキシコで暗殺された。誤文には細かいものもあるが、正文は平易。問L. 4. ソ連消滅後の1993年のことで、ロシアのエリツィン大統領とアメリカのブッシュ大統領(父)が結んだ。</p>	標準
IV	記述式 論述式	民主主義・民主制の歴史(古代～現代)	<p>空欄6の「タウン=ミーティング」は、一部の教科書にしか記載がなく細かい。空欄7にかかわる1848年のアメリカの女性参政権運動については教科書記述がないが(世界史Aの教科書には散見される)、今後注目しておくべき事項。実際、早大では他学部ではあるが2019年度に正誤判定問題で「アメリカの女性参政権運動は、1848年ニューヨーク州で開かれた集会から始まった。」という正文が出ている。空欄9の「ポピュリズム」は、複数の教科書に記載があるうえ、反グローバル化とナショナリズムが結びついて台頭した昨今の政治動向でもあり、得点差がつくところ。空欄12の「SNS」については、2019年度商学部で「アラブの春」の大きな要因として紹介されている。下線部14にかかわる論述については、従来のアメリカ大統領が東部のエリート層出身であったのに対し、ジャクソンが独立13州以外の庶民出身で最初の大統領であった点に注目しよう。それを実現した「背景や要因」として、白人男性普通選挙制の普及を背景に、エリート政治に反対する農民や下層市民、南部の大農園主の支持を獲得したことを想起すればよい。ジャクソンが米英戦争の国民的英雄として圧倒的知名度を誇ったことも大統領選を有利にした要因だが、字数的に言及する余裕はないだろう。</p>	やや難

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

# 地歴公民(世界史) 早稲田大学 商学部 3/3

## <学習対策>

高校教科書を中心に標準的な知識を問う設問を確実に解答できるようにしておきたい。正誤判定問題は、同大学の他学部の問題を使用するなどして経験を積んでおこう。欧米、特にアメリカ合衆国の近現代史は頻出分野なので、早くから学習計画を立て、過去問を利用するなど対策を講じてほしい。論述問題に関しては、受験世界史の知識だけでは対応しにくい問題が出題される年もあるが、教科書レベルの知識で解答できる年が多い。時事的な問題にも関心を払っておこう。